

5 特に問題となった病害虫の発生状況、原因解析及び防除対策

対象作物：イネ

病害虫名：トビイロウンカ

発生程度：早期：少

普通期：少

1 発生経過

(1) 飛来

- ・ 6月～7月の間はネットトラップ、予察灯では捕獲されなかった。
- ・ 7月2半旬に県予察圃場(諫早市、無防除)で見取り及び払い落とし調査では確認できなかったが、圃場内に設置した黄色粘着板において確認した。また、同時期にセジロウカンの飛来もあったことから、7月5～6日にかけて飛来があったと推察された。

(2) 発生～増殖

(早期水稲)

- ・ 7月5半旬に圃場での発生を確認したが、その後は発生圃場率、株当たり虫数ともに平年より少なく推移した。

(普通期水稲)

- ・ 7月6半旬に圃場での発生を確認したが、その後は発生圃場率、株当たり虫数ともに平年より少なく推移した。

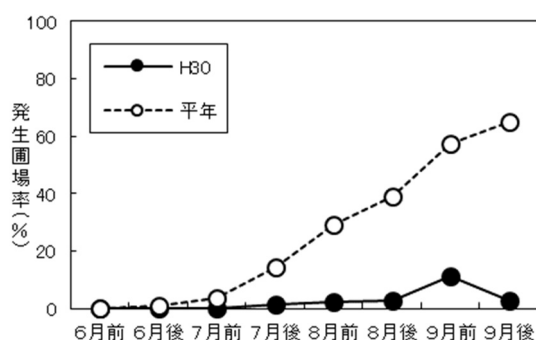


図 普通期・発生圃場率の推移

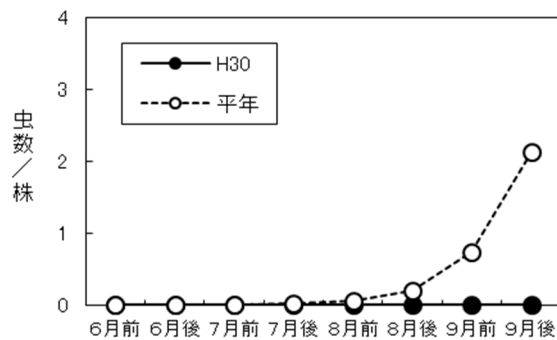


図 普通期・株当たり虫数の推移

(3) 被害の状況

- ・ 巡回調査において、坪枯の発生はみられなかった。

2 原因解析

- ・ 飛来量は少なかったと考えられる。

3 防除対策等対応内容

(1) 予察調査及び情報発信

- ・ 予察灯(4地点)、ネットトラップ(2地点)の調査データをHP上で提供。
- ・ 巡回調査：月2回(2～3半旬及び5～6半旬、県内概ね60～90圃場)
- ・ 予察圃場：(無防除圃場)調査月約3回(1、3、5半旬)
- ・ 上記調査結果に基づき7月11日に第一世代を対象とした防除情報を発表した。また、8月10日に第二世代の防除の徹底を図るため防除情報を発表した。

(2) 防除指導

- ・ 上記情報により適期防除、また圃場の見回りの徹底を促した。また各地域の防除検討会に出席し、適期防除指導を行った。

- ・各地域においては農協と普及組織が連携して生産者や無人ヘリ防除組織に対し、防除所が提供する情報を元に防災無線やチラシ等により伝達し、防除指導を行っている。

4 実際の防除

- ・県内全域で箱施薬剤（ピメトロジン主体）の施用
- ・県内全域において7月5半旬～6半旬、8月5半旬～6半旬の防除が行われた。
- ・防除薬剤について、7月5半旬～6半旬はブプロフェジン剤主体で、無人ヘリ薬剤は、ブプロフェジン剤にジノテフラン剤やエトフェンプロックス剤を混用している。8月5半旬～6半旬はジノテフラン剤、エトフェンプロックス剤、シラフルオフェン剤主体。

5 問題となった点

- ・特になし

6 今後の課題等

- ・薬剤感受性の把握
- ・無人ヘリ防除において臨機防除できる体制整備（ドローンの活用）。
- ・生産者段階における圃場単位での発生状況把握と早期防除徹底。
- ・株元に薬剤が十分付着するような薬剤散布の徹底。
- ・箱施薬剤の適正量及び適正時期の使用。

対象作物：水稲

病害虫名：いもち病

発生程度：早期 葉いもち やや多 普通期 葉いもち やや少
穂いもち やや少 穂いもち 並

1. 発生経過と原因解析

(葉いもち)

- ・早期水稲では6月6半旬から発生を認め、一部では多発圃場もみられた。その後も全般にやや多の発生で推移した。6月中旬や7月上旬の降雨の影響が考えられる。
- ・普通期水稲では6月6半旬から発生を認め、一部では多発圃場もみられたが、全般に平年並の発生で推移した。

(早期・葉いもちの発生推移)

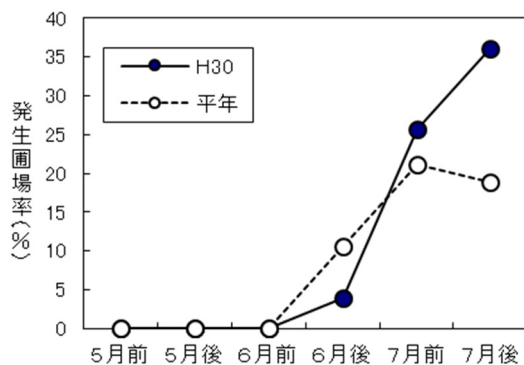


図 早期・発生圃場率の推移

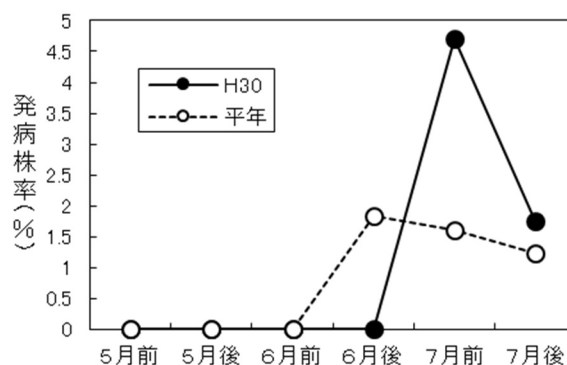


図 早期・発病株率の推移

(普通期・葉いもちの発生推移)

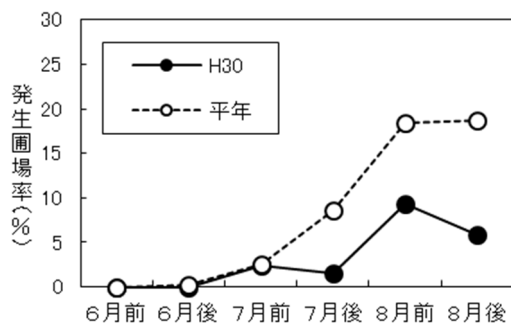


図 普通期・発生圃場率の推移

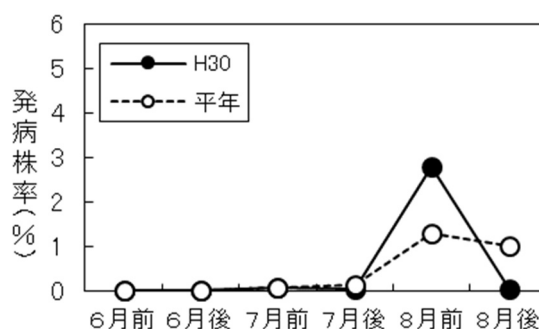


図 普通期・発病株率の推移

(穂いもち)

- ・早期水稲では7月5半旬から発生を認めた。葉いもちの発生はやや多かったが、出穂期前後の高温少雨により、穂いもちの発生は平年よりやや少な

かった。

- ・普通期水稻では9月3半旬から発生を認めた。葉いもちの発生は平年並であったが、出穂期前後の高温少雨により、穂いもちの発生は平年よりやや少なかった。

(早期・穂いもちの発生推移)

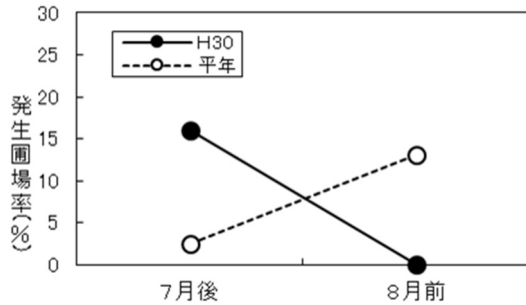


図 早期・発生圃場率の推移

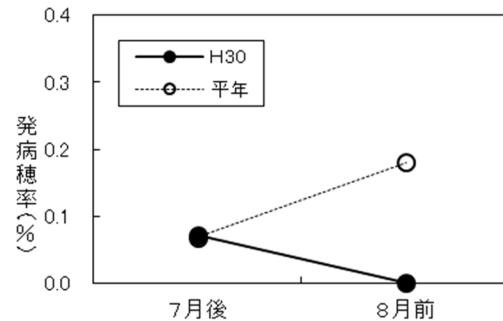


図 早期・発病穂率の推移

(普通期・穂いもちの発生推移)

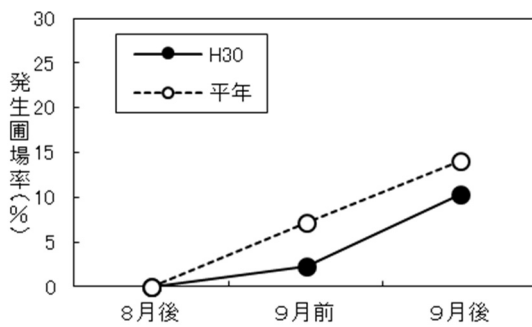


図 普通期・発生圃場率の推移

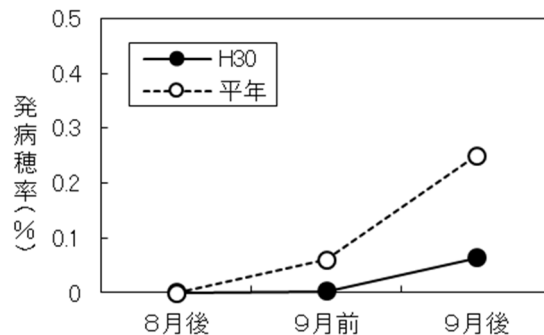


図 普通期・発病穂率の推移

2 . 防除対策等対応内容

- ・県内全域で、いもち剤を含む箱施薬剤が施用されている。
- ・早期水稻では、7月上中旬（出穂期～穂揃い期）の薬剤防除実施。
- ・普通期水稻では8月下旬～9月上旬（出穂～穂揃い期）の薬剤防除（フェリムゾン・フサライド剤、カスガマイシン・フサライド剤）の徹底。
- ・予察情報やBLASTM（HP上）での提供。

3 . 問題となった点

- ・特になし

4 . 今後の課題

- ・適正施肥の励行
- ・穂いもちの適期防除の徹底

対象作物：水稲

病害虫名：斑点米カメムシ

発生程度：早期 並

普通期 並

1. 発生経過と原因解析

- ・ 早期水稲では8月上旬に一部圃場でやや多い発生であったが、全般的に平年並の発生であった。
- ・ 普通期水稲では、9月上旬に一部圃場で多発圃場が見られたが、全般的に平年並の発生であった。

(早期における発生推移)

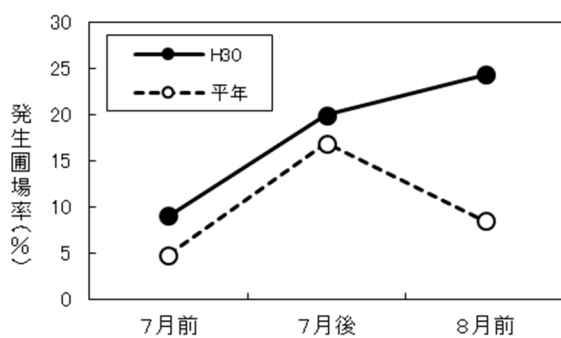


図 早期・斑点米カメムシの発生圃場率の推移

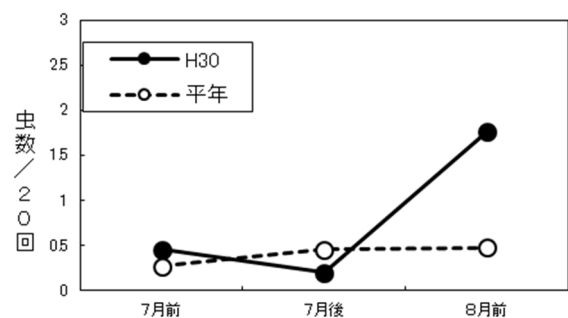


図 早期・斑点米カメムシの20回振り虫数の推移

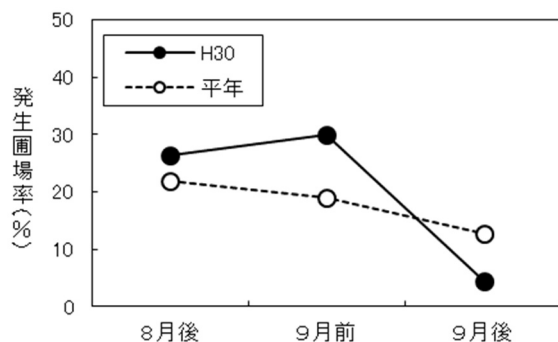


図 普通期・斑点米カメムシの発生圃場率の推移

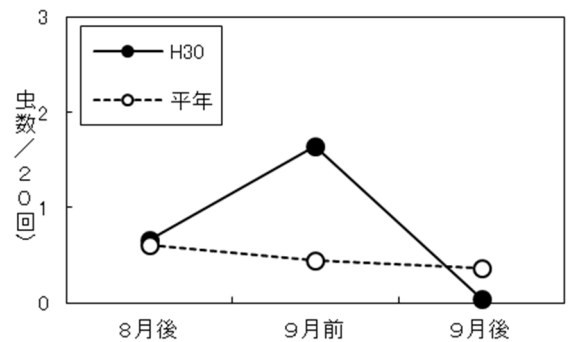


図 普通期・斑点米カメムシの20回振り虫数の推移

2. 防除対策等対応内容

- ・ 予察情報による情報提供
- ・ 圃場周辺の除草
- ・ 早期、普通期ともに出穂期以降のエトフェンプロックス剤、シラフルオフエン剤、ジノテフラン剤、エチプロール剤等による防除が実施された。

3. 問題となった点

- ・ 一部地域における圃場周辺の雑草管理の不徹底

4. 今後の課題

- ・ 特になし

対象作物：いちご

病害虫名：ハダニ類

発生程度：H29年産本圃：多、H30年産育苗圃：多

1. 発生経過と原因解析

(1) 発生経過

【本圃】

- ・平成29年産本圃では、定植後から平年に比べ発生が多かった。11月上旬以降さらに発生が増加し、調査終了の4月下旬まで発生圃場率・寄生株率ともに平年より高く推移した。

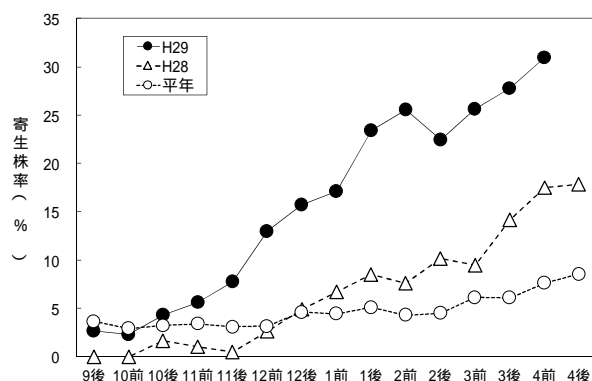


図 いちご ハダニ類 寄生株率の推移

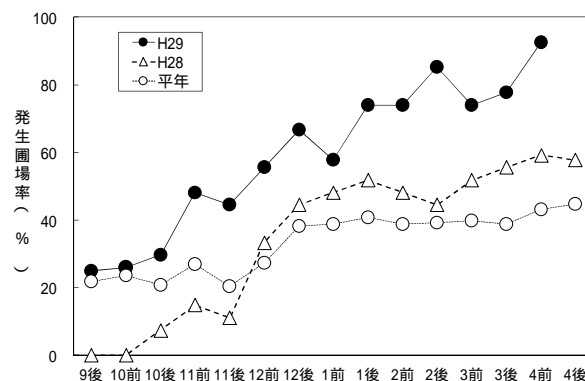


図 いちご ハダニ類 発生圃場率の推移

【育苗圃】

- ・平成30年産育苗圃では、5月上旬から急増し6月下旬に発生量がピークとなった。ランナー切り離し時期の7月上旬に一旦減少したが、その後再び増加し、定植期には平年並となった。

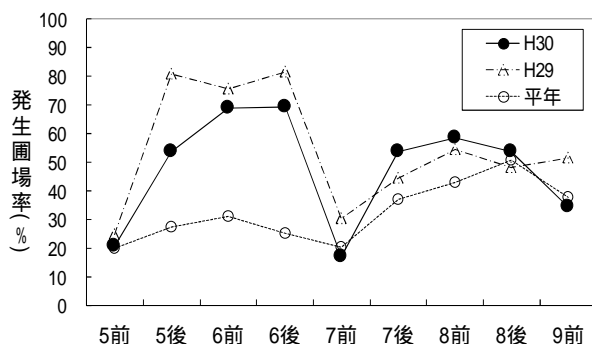


図 ハダニ類 発生圃場率の推移

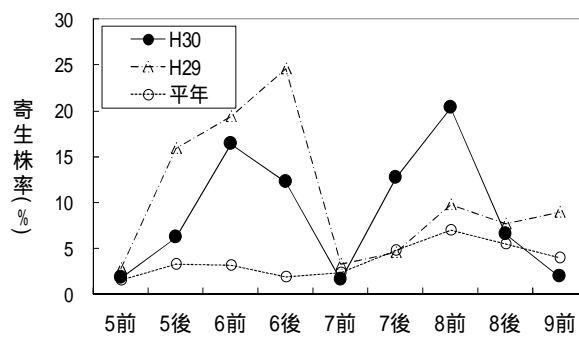


図 ハダニ類 寄生株率の推移

(2) 原因解析

- ・平成29年産においては育苗期の発生を十分に抑制することができず、本圃へ持ち込んだことが主な原因となった。10月下旬以降は気温が平年より高く推移したため、増殖が加速していった。
- ・収穫開始期以降は株の繁茂による薬剤の付着が不十分になった。生産者の高齢化等によりハダニの発生に気付かず防除遅れとなった。
- ・主要品種「ゆめのか」は茎葉が大きく株が繁茂しやすいため、薬剤散布時に葉裏や

株の中心部への薬剤の付着が不足する場合があります、防除効果が不十分となった。

- ・平成30年産育苗圃では、多発生となっていた前年産の本圃からの侵入に加え、3月以降の気温が平年より高かったことにより発生が増加した。
- ・主要殺ダニ剤の感受性が低下しており、防除効果の高い剤が少ない。

2. 防除対策等対応内容

- ・防除情報（平成29年8月16日、11月15日、平成30年6月14日、8月1日）および注意報（平成29年9月13日、12月18日、平成30年2月5日、4月16日、8月10日）を発表し、防除徹底を図った。

3. 問題となった点

- ・本県の主要品種「ゆめのか」は、従来品種に比べ茎葉が大きく株が繁茂しやすいため、ハダニ類の発生初期を見逃しやすく、また株内部への薬剤の付着が十分でない場合もあり、防除効果が不十分となった。
- ・「ゆめのか」は長期間の収穫が可能であるが、ハダニ類の多発により収穫を早く切り上げる圃場も見られた。
- ・「ゆめのか」は着果数が多く、3月以降収穫作業が過重となり防除作業が遅れることがある。
- ・安定した効果の期待できる薬剤が少なくなっており、一部地域では新規系統であるピフルブミド剤の感受性低下が確認されている。
- ・生産者の高齢化によりハダニ類の発見が遅れ、発生初期の防除ができなかった。

4. 今後の課題等

- ・化学農薬に頼らない防除技術の導入拡大（土着天敵を含むハダニ捕食性天敵、気門封鎖剤、高濃度炭酸ガス処理等）
- ・薬剤感受性検定の実施
- ・新規有効薬剤の登録推進

IPM事例

- ・部会でミヤコカブリダニ及びチリカブリダニと化学薬剤を組み合わせた防除対策を作成し配布している。
- ・バンカーシート（ミヤコカブリダニ）によるハダニ防除試験を各地域で実施。

定植前のCO₂処理事例

- ・現地試験は実施しているが、実際に農家が導入している事例はない。

対象作物：いちご

病害虫名：炭疽病

発生程度：H29年産本圃：少、H30年産育苗圃：少

【課題】

イチゴ炭疽病のエタノール検定について

【ポイント】

- ・エタノール検定実施の有無・活用法。
平成25年度から実施。8月の予察情報に、全体の潜在感染株率を掲載。
- ・検出した菌の病原性の判定方法。
農林技術開発センター病害虫研究室にて判別。
- ・病原性がない菌（偽陽性）の取扱い。
偽陽性株も含めて潜在感染株を調査し予察情報に掲載している。

1 発生経過

【本圃】

- ・平成29年産本圃では定植直後から年明け1月まで発生が見られたが、発病株率は平年と比較して低かった。

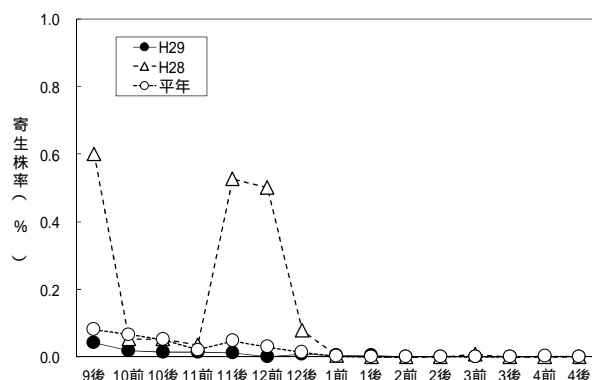


図 いちご 炭疽病 発病株率の推移

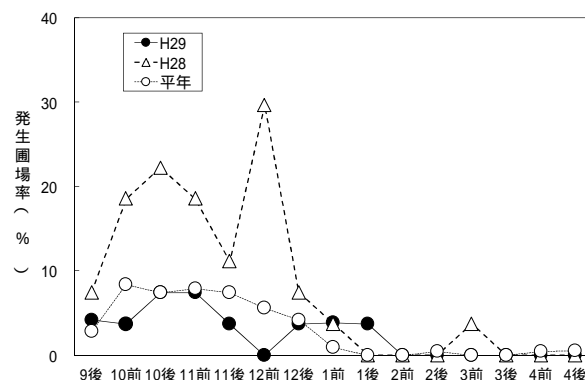


図 いちご 炭疽病 発生圃場率の推移

【育苗圃】

- ・平成30年度産育苗圃では、7月上旬に発生を認めたが、その後の増加はほとんどなく少発生となった。
- ・7月に実施したエタノール検定の結果、潜在感染株は31.7%であった。

平成30年度	31.7%
平成29年度	70.3%
平成28年度	38.6%
平成27年度	61.1%
平成26年度	24.6%
平成25年度	42.0%

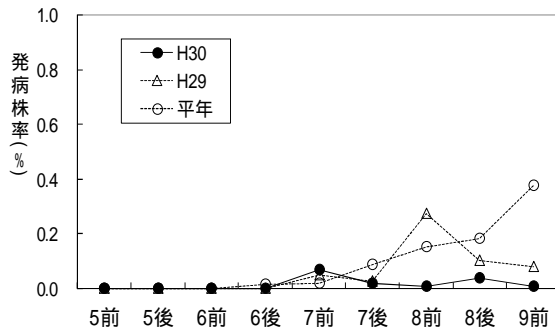


図 炭疽病 (G.cingulata) 発病株率の推移

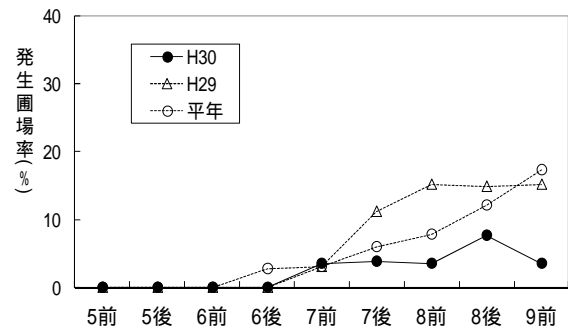


図 炭疽病 (G.cingulata) 発生圃場率の推移

2 原因解析

【本圃】

・育苗終期（9月上旬）の発生圃場率15.2%（平年17.4%）、発生株率0.1%（同0.4%）と低く、病原菌の本圃への持ち込みが少なかった。

【育苗圃】

・薬剤のローテーション散布・罹病株の除去等の徹底や、6～8月の降水量が平年比85%と少なかった。

3 防除対策等対応内容

- ・JA指導員、県普及指導員の診断技術向上を図るため病害虫研修会を開催し、病虫害診断方法について指導を行った。
- ・関係機関による生産対策会議や地域振興協議会で注意喚起を行った。

4 問題となった点

- ・特になし。

5 今後の課題等

- ・雨除け育苗施設の推進。
- ・炭疽病耐病性品種の育成。

6 エタノール検定の実施と活用法・問題点について

- ・結果は予察情報として周知を行っているが、よりエタノール検定により防除意識を高める活用方法はないか。
- ・潜在感染株率が高い場合、病害抑制への注意喚起はどのように行っているか。

対象作物：トマト

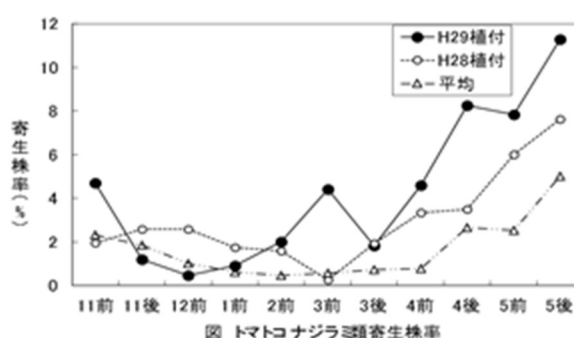
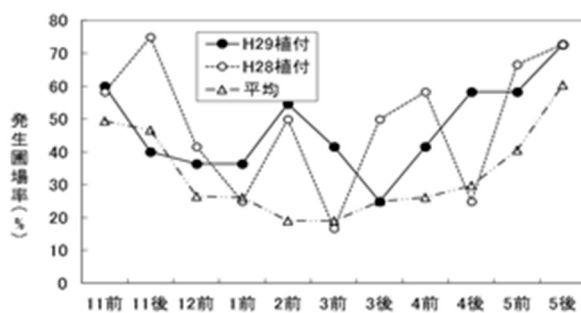
病害虫名：タバココナジラミ（バイオタイプQ）、トマト黄化葉巻病

発生程度：タバココナジラミ 多
 トマト黄化葉巻病 多

1. 発生経過と原因解析

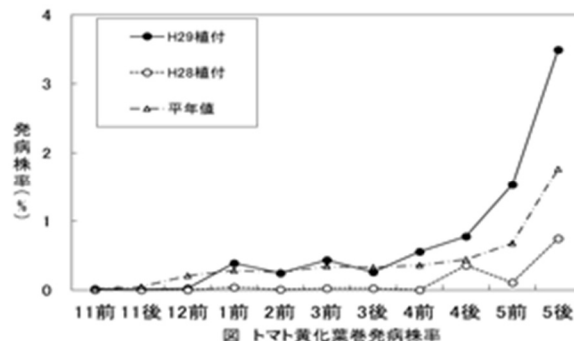
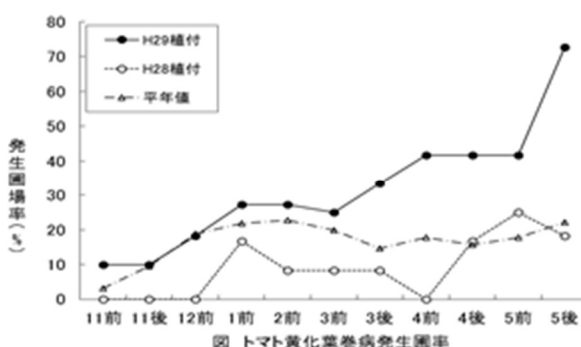
(1) タバココナジラミ

- ・平成29年秋定植のトマトでは、11月の生育初期から発生が見られ、その後おおむね平年より多い発生で推移した。
- ・育苗期における防除対策が不十分で、本虫が寄生した苗が本圃へ持ち込まれた圃場があった
- ・防虫ネットの設置は普及・定着しているが、完全には抑えきれなかった。



(2) トマト黄化葉巻病

- ・平成29年秋定植のトマトでは、11月の調査開始当初から発生が見られ、その後おおむね平年より多い発生で推移した。
- ・発病株の早期抜き取りが徹底できなかった。



2. 防除対策等対応内容

- ・予察情報を主体とした情報提供及び注意喚起。防除情報第17号（平成30年3月15日）、防除情報第2号（平成30年4月16日）、防除情報第4号（平成30年5月15日）。
- ・発病株の早期抜き取り及びタバココナジラミの早期防除
- ・定植時の薬剤処理や生育期の薬剤散布、ハウス開口部への防虫ネット設置や黄色粘着板の設置、作付け終了後のハウスの密閉蒸し込みなど

3 . 問題となった点

- ・育苗期間における防除の不徹底
- ・栽培後期の場合、結実している罹病株の抜き取り処分を実施する農家が少ない。

4 . 今後の課題

- ・発病株の早期抜き取りの徹底
- ・作付け終了後のハウスの密閉蒸し込みの徹底

定植直後の発生事例

- ・9月以降本病の診断実績があり、定植直後の発生が確認された。

薬剤抵抗性の発生状況

- ・現地情報によると効果が低下している薬剤があることから、抵抗性が発達していると推察される。

対象作物：野菜類

病害虫名：チョウ目害虫

発生程度：H30年度 やや多～多

2. 発生経過と原因解析

(1) 発生経過

- ・フェロモントラップ（諫早市）の誘殺数は、ハスモンヨトウでは10月2半旬にピークがみられた（図1）。オオタバコガでは9月5半旬及び10月1半旬にピークとなり（図2）、シロイチモジヨトウでは9月5半旬にピークが見られた（図3）。
- ・10月前期のばれいしよにおける巡回調査（20筆）の結果、ヨトウムシ類の被害株率は16.3%（平年1.9%）、発生圃場率65.0%（同25.3%）であった。
- ・10月前期のいちごにおける巡回調査（27筆）の結果、ハスモンヨトウの食害株率は11.3%（7.2%）、寄生株率は2.0%（1.9%）、発生圃場率は81.5%（61.4%）であった。オオタバコガの寄生株率は0.6%（0.0%）、発生圃場率は22.2%（0.6%）であった。
- ・10月前期のブロッコリーにおける巡回調査（12筆）の結果、ハスモンヨトウの寄生株率は3.3%（2.9%）、発生圃場率は41.7%（28.1%）であった。シロイチモジヨトウの寄生株率は3.7%（2.3%）、発生圃場率は33.3%（20.5%）であった。

(2) 原因解析

- ・梅雨明け以降乾燥条件が続き、本虫の生育に好適条件となったことから、発生が多くなった。

2. 防除対策等対応内容

- ・防除情報（平成30年10月2日）および注意報（平成30年10月16日）を発表し、防除徹底を図った。

3. 問題となった点

- ・発見が遅れ、発生初期の防除が徹底できなかった。

4. 今後の課題等

- ・早期発見、早期防除
- ・定植前の育苗トレイへの薬剤処理や定植時の粒剤の株元処理の徹底

近年の増加状況

- ・本年のチョウ目害虫の発生状況は全体としては平年並みで推移していたが、9月4半旬以降発生が急増した。

予察の考え方

- ・フェロモントラップの誘殺結果は発生予察に積極的に活用している。

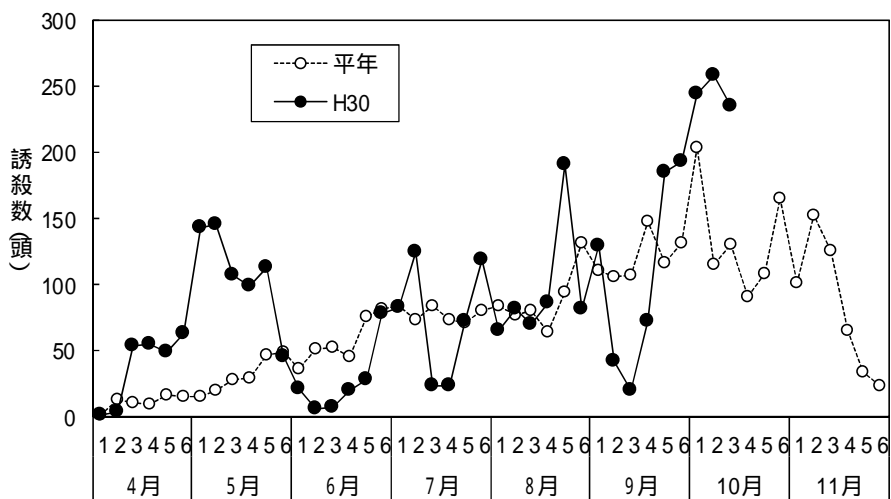


図1 ハスモンヨトウのフェロモントラップにおける誘殺状況(諫早市小船越) (月・半旬)
 平年: H20 ~ H29年の平均値(最大・最小値除く)

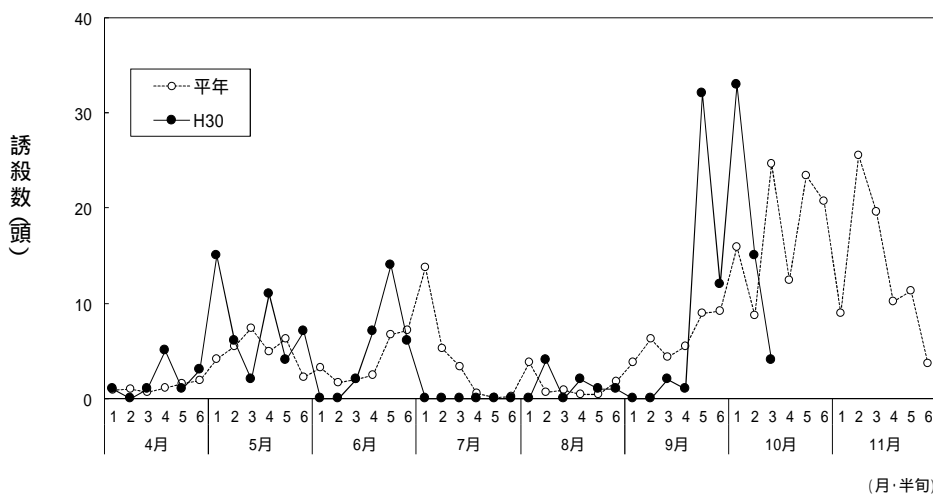


図2 オオタバコガのフェロモントラップにおける誘殺状況(諫早市小船越)
 H22より粘着板からファネルトラップに変更
 平年: H19 ~ H29の平均値(最大・最小除く)

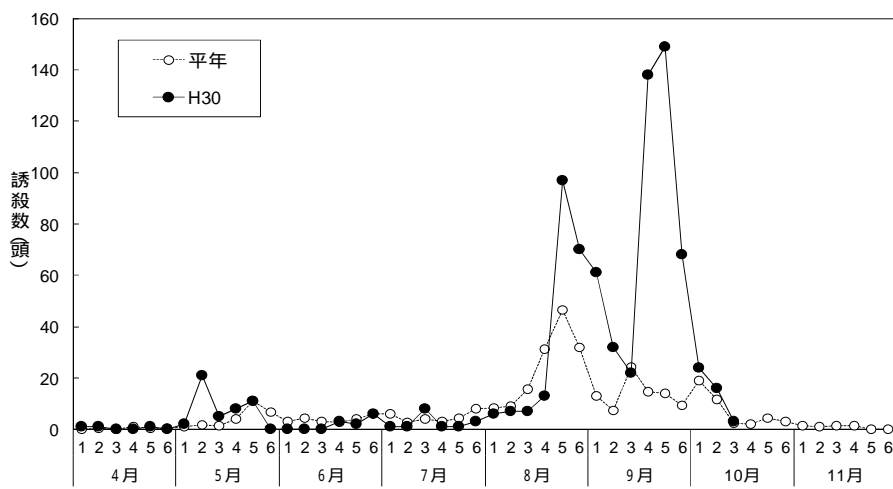


図3 シロイチモヨトウのフェロモントラップにおける誘殺状況(諫早市小船越) (月・半旬)

対象作物：トマト

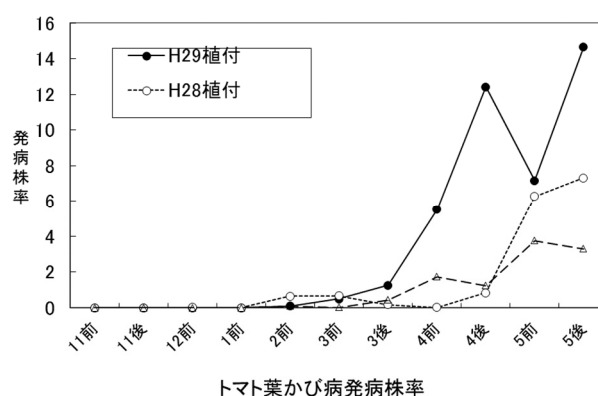
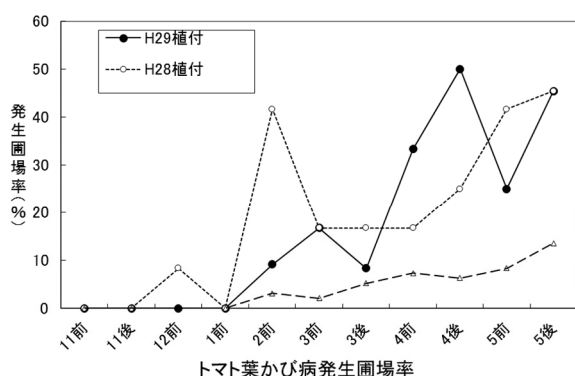
病害虫名：葉かび病

発生程度：やや多

1. 発生経過と原因解析

(1) 発生経過

- ・ 2月上旬から発生が認められた。その後4月上旬から発生が急増し、平年よりやや多い発生であった。



(2) 原因解析

- ・ 4～5月上旬にかけて降水量が多かったため、ハウス内の湿度が高くなった。

2. 防除対策等対応内容

- ・ 栽培現場においては、換気や土壌水分管理、発病葉の除去及び圃場外への持ち出し、薬剤防除の徹底が指導された。

3. 問題となった点

- ・ 抵抗性品種（麗容、麗旬など）を導入した産地においては葉かび病に対する防除の意識が薄く、薬剤散布が徹底されていない。

4. 今後の課題等

- ・ 早期発見、早期防除
- ・ 抵抗性品種における防除体系の確立

5. 抵抗性品種が打破された事例

- ・ 抵抗性品種がおおむね導入された地域においても、葉かび病の発生が見られていることから、抵抗性が打破されていることが推察される。

対象作物：アスパラガス

病害虫名：アザミウマ類

発生程度：並

1. 発生経過と原因解析

(1) 発生経過

・立茎後から9月上旬頃まで平年並で推移したが、その後増加した(図)。

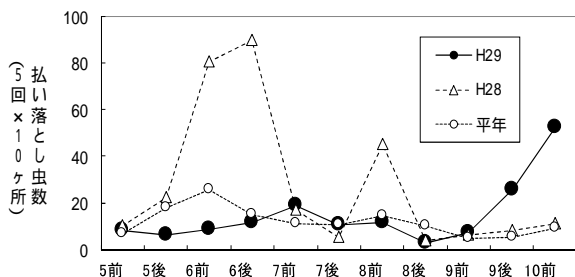


図 アザミウマ類 払い落とし虫数の推移
払い落とし虫数は成虫、幼虫の合計

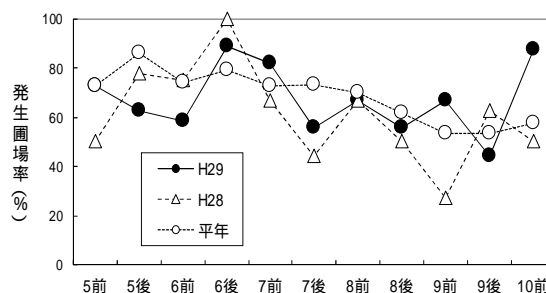


図 アザミウマ類 発生圃場率の推移(巡回調査)

図 巡回調査におけるアザミウマ類発生の推移

(2) 原因解析

- ・発生状況は地域差および個人差が大きく(表)、生産者個人の管理によるところが大きい。
- ・巡回地点のうち薬剤防除を徹底しても密度が下がらない2圃場において、アザミウマ類(成虫)の種構成を調査したところ、ミカンキイロアザミウマの割合が100%と80%(残り20%はヒラズハナアザミウマ)であったことから、効果のある薬剤が異なる可能性がある。

表 巡回調査地点における圃場ごとのアザミウマ類の発生状況

		5月上	5月下	6月上	6月下	7月上	7月下	8月上	8月下	9月上	9月下	10月上	期間計
K地区	A圃場	0	0	3	10	3	0	1	2	0	5	15	39
	B圃場	0	0	5	2	3	3	0	0	0	0	1	14
	C圃場	0	7	0	1	0	0	0	0	0	0	0	8
T地区	D圃場	3	0	2	7	8	12	50	0	24	64	136	306
	E圃場	15	4	3	34	156	74	6	9	24	158	196	679
	F圃場	32	21	0	6	7	3	14	3	2	0	12	100
F地区	G圃場	1	1	0	38	7	0	0	1	2	0	31	81
	H圃場			5	0	3	0	18	10	8	3	27	74
	I圃場	29	15	85	7	17	1	46	0	9	0		209

2. 防除対策等対応内容

- ・異なる系統による薬剤のローテーション散布

3. 問題となった点

- ・一部地域ではミカンキイロアザミウマが優先種となっており、薬剤防除に苦慮している。
- ・有効薬剤が少ない

4. 今後の課題等

- ・県内主要産地におけるアザミウマ類の種構成調査と薬剤感受性検定の実施
- ・有効薬剤の登録推進

対象作物：たまねぎ

病害虫名：べと病

発生程度：並～やや多

1. 発生経過と原因解析

(1) 発生経過

- ・ 越年罹病株の初確認日は1月15日で、発生時期は平年より早く、前年並みであった。
- ・ 2次感染株は2月上旬に発生を認め、その後はやや少ない発生で推移したが、中晩生品種では4月下旬以降急増し、発生圃場率は過去10か年で最も高くなった。

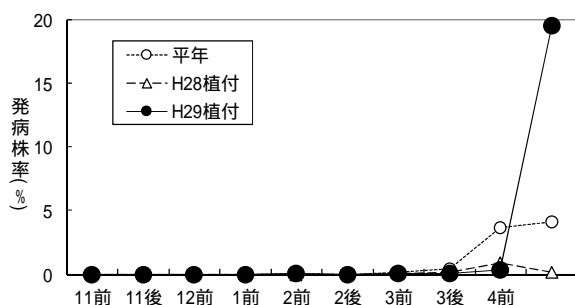


図 べと病発病株率の推移

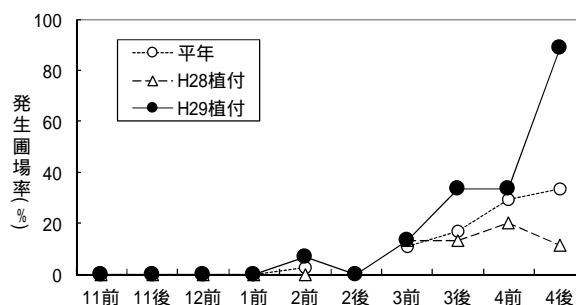


図 べと病発生圃場率の推移

(2) 原因解析

- ・ 越年罹病株の発生は前年並みの1月中旬頃から見られたが、抜取りの徹底や定期的な予防防除、地域一斉防除の励行により、極早生・早生品種への被害は少なかった。
- ・ 中晩性品種では3月に二次伝染に好適な気象条件が続いたこと、4月の降水量が平年より多かったことから、発生が急激に拡大し、越年罹病株の抜取りや薬剤防除が徹底されていない圃場では被害が大きかった。

2. 防除対策等対応内容

- ・ 平成30年3月2日に防除情報、4月27日に注意報を発表し、越年罹病株の抜取りや予防防除の徹底、発病株の適正な処分等、時期ごとの防除対策について周知を図った。
- ・ 1月上旬より主産地において定点圃場を巡回し、越年罹病株の発生状況を調査し、関係機関へ情報提供を行った(たまねぎネット：配信は農業革新支援専門員による)
- ・ 県関係機関および全農・JA指導員が連携し、定期的な現地検討会を実施した。また、振興局単位で定点調査圃場を設置し、生育状況や発病状況に関する調査結果を関係機関で情報共有した。

3. 問題となった点

- ・ 生産者が越年罹病株を見分けきれしていないこと、兼業等のため定期的な抜取りが徹底できていない圃場で春季に多発する例が見られた。
- ・ べと病による茎葉の傷みから腐敗が発生したり、玉肥大が不十分となった。

4. 今後の課題等

- ・ 卵胞子による一次伝染の感染生態の解明と対策
- ・ 無人航空機防除に使用できる薬剤の登録推進

対象作物：きゅうり

病害虫名：キュウリ黄化えそ病

発生程度：少

1. 発生経過と原因解析

- (1) 巡回調査では本病の発生は認められなかったが、診断実績が2件あり、発生が確認されている。
- (2) ミナミキイロアザミウマの発生はおおむね平年並であった。

2. 防除対策等対応内容

- ・施設周辺雑草の除去
- ・防虫ネットの設置によるアザミウマの侵入防止
- ・生育初期の防除の徹底
- ・発病株の早期発見、除去
- ・アザミウマを対象とした薬剤散布の徹底（スピノシン系、マクロライド系、ネオニコチノイド系剤等）。
- ・同一系統の薬剤を連用しない。
- ・作付終了後の蒸し込み処理。

3. 問題となった点

- ・防虫ネットの設置や発病株の除去、栽培終了後の蒸し込み処理が徹底されていない
- ・栽培終期の防除不足。
- ・ミナミキイロアザミウマに効果の高い薬剤が少ない。

4. 今後の課題

- ・効果の高い薬剤の登録推進
- ・化学農薬のみに頼らない防除体系の確立（天敵の利用等IPMの取組み）

5. 天敵の利用状況

- ・スワルスキーカブリダニが一部で導入されている。

対象作物：果樹全般

病害虫名：カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ）

発生程度：前半（7月以前）多

後半（8月以降）少

飛来時期：前半（7月以前）並

後半（8月以降）早

1. 発生経過と原因解析

（発生経過）

（1）チャバネアオカメムシの越冬量調査結果では平年並であった。（平成30年1月調査；0.35頭/m²、平年0.31頭/m²）。

（2）越冬世代成虫（4月～7月）のフェロモントラップによる誘殺量は、県内各地で平年より多く推移した（図1）。当年世代（8月～10月）は各地とも平年より少なく推移した。

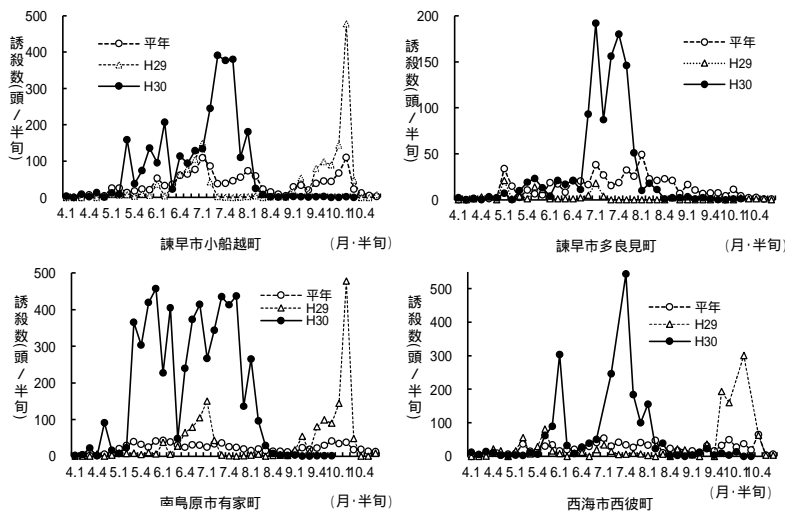


図1 チャバネアオカメムシ・ツヤアオカメムシの誘殺状況(黄色コガネネール)

（3）予察灯の誘殺数は8月中下旬に発生ピークが見られた地域があったが、その後は平年より少なく推移した（図2）。

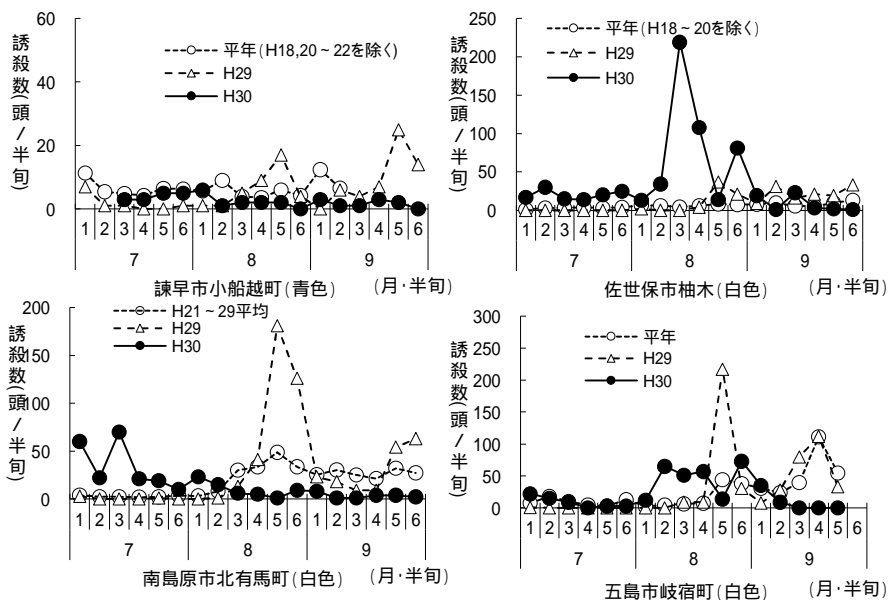


図2 果樹カメムシ類誘殺状況(予察灯;白色、青色)

(4) ヒノキきゅう果に寄生する虫数は、8月下旬にはほとんど見られなくなり、このころにはヒノキきゅう果から離脱していたと考えられる。(表1)。

表1 H30年度ビーティング調査結果 (頭/枝)

	チャバネアオカメムシ			ツヤアオカメムシ			合計	平年
	成虫	幼虫	計	成虫	幼虫	計		
7月下旬	1.2	2.7	3.9	0.2	0.9	1.0	4.9	2.0
8月下旬	0.5	0.1	0.6	0.1	0.0	0.2	0.8	1.7

2. 原因解析

フェロモントラップ誘殺数から越冬量は平年より多かったとみられ、またヒノキきゅう果の着生量は平年並であった。そのため8月下旬までにヒノキきゅう果が吸汁されたことから、餌不足によって8月中旬の早期離脱を促し、新世代成虫の増加を抑制した。

3. 防除対策等対応内容

- 2月13日 技術情報 越冬量調査の結果について
- 5月15日 防除情報 フェロモントラップの誘殺数増加
- 8月 6日 防除情報 当年世代の飛来予測について

4. 問題となった点

今年は、越冬量調査の結果が前半期(4月~7月)のフェロモントラップ誘殺数を反映できず、5月の情報発出の判断が困難であった。

5. 今後の課題

越冬量調査地点の見直し。

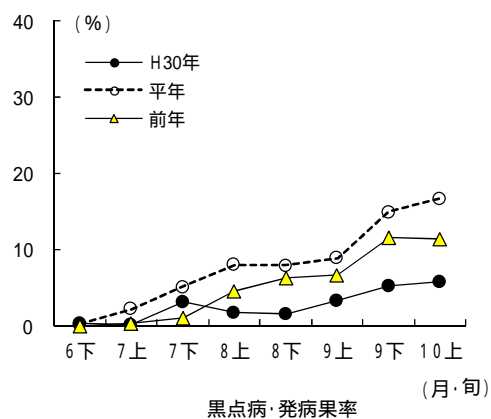
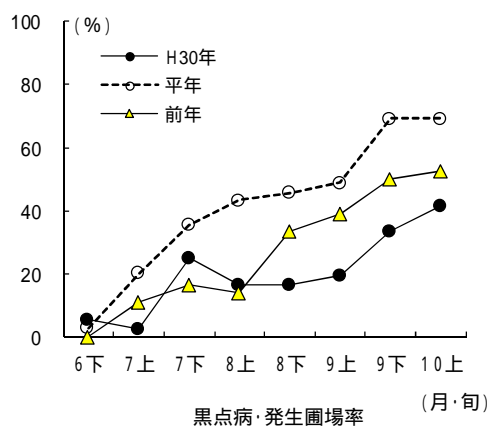
対象作物：カンキツ

病害虫名：黒点病

発生程度：少

1. 発生経過

発生は平年よりやや遅い7月上旬から認め、7月下旬までは発生が少なかった。8月上旬以降増加したが、その程度は平年より少なかった。



2. 原因解析

- (1) 6月は数日間連続した降雨が少なく、適期に防除ができた。
- (2) 早い梅雨明け(7月上旬)により7月中旬～8月の降水量が少なかった。

3. 問題となった点

近年、9月以降に発生する黒点病が問題となっている。しかし、収穫期が近づいている中、収穫前日数が短く、かつ効果が高い薬剤が不足しているため、本病を十分に抑えることが難しい。

4. 今後の課題

- ・梅雨期、秋期ともに、降雨状況に応じた的確な薬剤散布の徹底
- ・発生源となる枯れ枝の除去徹底